

授業方法について独自に工夫していること 【人文社会科学系】

講義を聴くだけだと、どうしてもぼんやりする学生が出てくるので、以下のことを取り入れている。

- ・学生を2人一組のペア活動を取り入れ、全体で発表する機会を多く持つ。

例：2人で意見を出し合い、その後それぞれのペアの意見を発表する。

- ・個人にプレゼンをさせ、それを他の学生が評価する(内容の分かりやすさ、パワポの工夫、話し方など)。

評価シートは教員だけがわかる形で記名させ、後でそれぞれに自分の発表についての無記名の評価表を渡す。

最初の1班のみ、研究室に呼んで、レポートの仕方を説明している。最初がよければ、あとの班はそれをまねしていくので、最初が肝心と心掛けている。

英語学概説ということから、英語学については是非身につけておいてほしい内容を扱った。また、履修している学生の中に教員を目指す学生が多いことを意識して、教員になった時に役立つ内容を中心に授業を構成した。

発音の仕方を身につけるとい技能習得の面が強いため、練習の機会を授業内で設けるようにしている。同時に、大勢の受講者がいるため、授業内では個々の発音の仕方に注意を払うことができないため、授業外での対応も行っている。また、詳細な口の使い方が分かるように、視聴覚資料をできる多く提示するように試みている。

演習授業ではあるが、各自の発表の前に、必ず作者について、時代についての概説を行い、共通理解を深められるように授業を構成している。

毎回の発表後、学生同士で相互評価を行わせるために、コメント用紙提出を必須としている。

- ・積極的に発言しない(できない)学生には、答えやすい質問をふることで、話しやすくする。
- ・学生の意見を否定せず、しかし、別の考え方もできることを説明し、多角的な視野を身に着けてもらう。
- ・とにかく、こちらが楽しそうに話す(本当は楽しくなくても、楽しそうに話す)。

授業の進展に応じて、様々な映像の視聴を行い、日本語の方言の使用状況についての理解に努めている。また、授業参加者に、毎回、授業のポイントと質問(なければ感想)を書いて提出してもらう。そして、できるだけ、理解を先延ばしにしないために、次回、質問に対する答え、誤解に対する訂正から授業を始めている。

この授業の目的はドイツ語の文法力、読解力を養成するだけではなく、ドイツの歴史を学ぶとともに過去を振り返り、将来のドイツや日本のことを考える機会を提供することである。そのためにユダヤ人の迫害に関する映画を鑑賞する機会を設け、感想文を書いた。またトーマス・マンの「ドイツとドイツ人」の抜粋を読み、歴史的の勉強を行った。アンケートの間2や間3で高い評価が出ているのは、こうした授業の内容を反映したものであろう。充実した授業が出来た。

PowerPointなどを用いている。映像資料などを用いている。

学生が主体的、能動的、自律的に授業に関わり、学修できるようにしている。初回の授業で学生に既習事項、授業への関心、ニーズ、学修目的等に関するアンケート調査を行う。また、授業に関する期待、希望等についても回答してもらう。さらに、学生の趣味、関心、アルバイト、サークル活動、国際交流、留学経験、海外研修経験等についても、任意で差し支えない程度に回答してもらう。それをもとに、授業中、あらゆる場面で学生全体、または、個人のニーズ、興味関心等に学修内容(授業内容)がどう関わっているかを確認し、学修の意義を考えながら授業を進めている。言い換えれば、当該授業での学修内容が学生のキャリア形成、キャリア開発等にどうつながるかを意識することで、学修目的、到達目標を明確にして授業に臨むことができ、主体的、能動的な学修が促進されると考えている。授業後の省察も行っている。

講義形式の授業については、なるべく自身の言語活動との関連で授業内容を捉えることができるよう、課題や話題を用意している。演習形式の授業については、特段のルールが見えにくく、一見、無秩序に見えることばの用法が、実は一定の約束事の下で用いられていることがおのずと浮き彫りになるよう、手順を踏んで整理することの重要性を理解させることに力を入れている。

学生の興味、関心はひとりひとり異なり、一斉授業でのきめ細やかな対応は難しいことも多いが、課題を一人一人の興味に従った自由選択とすることで、少しでもニーズに沿うように心がけている。受け身の授業にならないよう、レポート作成や口頭発表を課し、プリント配布や説明の仕方にも留意をし、授業中に学生からの質問や発言がしやすい雰囲気作りに努めた。

パワーポイントに沿って授業を進める形を基本としながら、適宜、新聞等による最新の話題にも触れ、現代社会の抱えるさまざまな問題への興味関心を喚起するよう努めている。レジュメおよびワークシートを毎回配布して、理解を深めるよう工夫している。講義形式の授業であるが、学生の発言機会をできるだけ設けている。

この授業では学生がみずからの視点、関心に基づいて主体的に課題に取り組めるように、学生発表や質疑、討論を中心とする授業方法をとっている。

一学期で中国文学史という広範な内容を講義するため、授業の最後にその日の講義内容に関する問題を出すことにしている。その解答を確認することによって理解状況を把握するとともに、学生に対し重要なポイントを明確に示す狙いがある。

外国語演習Ⅲは、今回担当するのが初めてであったので教科書を用いた(外国語を扱う授業なので、英語以外でもよかったが、冒険することをあきらめ、英語を選んだ)。ただ、教科書は平易なので、受講者にはそれ以上のことを調べて発表してもらうよう指示した(が、十分でなかった。もっと強調すればよかったと反省している)。
音声学は、知識を与える形の授業だけでなく、頭を使ってもらうよう、演習も行うようにした。音声面での身近な現象はいくらでもあるので、それらをできるだけ多く紹介するよう努めた。

人数の関係で全員に発表を割り当てることができた。発表を通して、教科書から読み取れる内容にプラスして、関連事項を自分で調べて人に分かりやすく伝える訓練の機会を与えた。英語論文の内容に関するレポートを課したが、これは外国語であるがゆえに同じ文章に何度も目を通す(予習、授業、レポート執筆の最低でも3回、ふつうは4~5回読むはずである)ことで、文の構造、内容ともにじっくり考えながら読む機会を得ることになる。日本語ではできない思考の訓練であるといえる。今回は、何度読んでも価値のある論文を選んだと思っている。

言語が自然の産物ではなく、社会的に形成されるものであるということを、日本語の女ことばの成り立ちや海外の言語政策のあり方を探ることで理解してもらうため、このテーマに関しては発表形式を取り入れた。

古い時代の言語研究を扱う場合、その時代の政治的・社会的背景について理解することが重要なので、それに関しては、学生による発表を行った。また、英語の学術文献の読解力をつけてもらうために、講義で扱った内容を踏まえた英文の専門書の一節を講読した。

必ずしも文学に興味のある学生だけが受講するわけではないので、あまり専門的な話をするのではなく、ストーリーの面白い作品を選び、その作品の面白さを伝えながら、アメリカ文学の特色というべきものの幾分かでも伝えられるよう、工夫している。

- ・最近、高等学校で地理を学んできていない学生が9割以上である。そのため、基礎的な知識が不足していると思われる。そこで、講義の1, 2時間目は、自然地理の基礎的な知識を学んでもらうために、地形や水文の概略を説明した後に、気候の内容に入るようにしている。
- ・将来教壇に立つ学生である。知識の詰め込みではなく、対話形式で授業を進めることにより、自ら考えることの大切さを学んでくれればよいと思っている。
- ・耳学問にならないように、雨温図や白地図などを使った作業学習を取り入れている。

古典文学を研究する上で欠かせないくずし字の習得を目指すため、江戸時代に作られたテキストを用いて、くずし字を読む練習を数回行った。妖怪がテーマの挿絵のある作品を取り上げ、興味を持って取り組めるよう工夫した。

グループ発表(2~3人)では、発表の成果と問題点を共有するため、発表担当ではない学生も事前に当該作品を読み、発表に対してコメントさせた。発表担当グループに対しては、1週間前までにレジュメを提出させ、改善点を指示した。また、教育大学という特色を生かし、教材としての観点からも作品を分析させた。

このように、参加者全員の丁寧な読みによって、物語が持つ様々な魅力を明らかにし、議論する力を養うよう努めた。

半期だけのロシア語入門の授業のため、文法としては文字や簡単な挨拶から始め、ごく初歩的なことしか触れることができない。そのため、学生たちが興味を持てる内容になることを重視し、習った文法事項はなるべくグループ・ペア練習の中で会話などを通じて使ってもらえるようにした。そしてロシア語文法の基礎知識を身につけてもらい、今後の言語習得に役立つような授業を心がけた。また、異文化に触れる機会であることも考慮し、言語の問題以外にも、文化や国民的な個性などについても折に触れ話をした。

学生の参加が得られるように、必ずランダムで指名したうえで、授業内容に関して質問をするように指導している。質問が出ない場合には、すべて理解していることとみなし、こちらから授業内容について質問をするため、真剣に授業を聞くようになった。

特別なことはない。まず、教授する内容をセレクトし、それを論理的に配列して、学生が理解しやすい、また興味をつなぎやすいような構成とすることに留意する。使用する史料はプリントに印刷して配布する、板書は話の構成が辿れるようにレジュメ化した形で明確に書く、話すときは学生の反応にも注意して、必要に応じて繰り返し説明することも避けない。そのため、時間に多少の余裕があるように内容は精選しておく、などの当たり前の作業を重ねるだけである。

できるだけ、教科書などのもとになる史資料をコピーして、学生に配布しています。

どのような基準で学業成績の結果を出したか。 【人文社会科学系】

- ・授業内での発言内容。
- ・プレゼン。
- ・筆記試験。

テスト50、班ごとのレポート50だが、欠席が多いと減点していく。4回欠席でD。班ごとのレポートは、どこを分担したかを明記してもらい、個々の仕事をきちんと評価できるようにしている。

学期末に行った筆記試験と出席状況

出席、小テスト、課題、期末テストを総合して行いました。

学生が独自に調べ発表する態度・レジュメの内容と、学生同士の質疑応答及び教員からの指摘によって、どれだけレポートとしてまとめ上げることが出来たか、の両面を総合して評価した。

- ・授業への出席、発言、発表の水準を踏まえて成績をつけた。
- ・ほとんどの受講生は極めて良質であったので、素直に高水準の成績を認めた。

授業時に興味を持ったことについての詳細な調査を行ったレポートの提出(70%)。綿密な調査・広範囲なアンケートを行い、データの収集が充実していたものを評価した。さらに授業後に提出する課題の取り組み具合(30%)とし、毎回の授業に対する理解度を測定した。

授業ではまず文法の復習を行った。そして文法の小テストを行った。またゾフィー・ショルの「白バラ」を抜粋で講読し、中級ドイツ語の講読練習を行った。そしてこれについても小テストを行った。またトーマス・マンの「ドイツとドイツ人」の抜粋を読み、これについても小テストを行った。このように計3回の小テストのほか、映画の感想文、出席点なども考慮し、総合的に判断した。

国文学講義AⅡについては、原則試験(持ち込み不可)で評価している。国文学演習CⅠは、発表内容(70%)と授業の参加度合い(30%)によって評価した。

学生が授業の目的、到達目標をどれだけ達成できたか、主体的、能動的、自律的に授業に関わることができたか、授業の成果、課題等と省察できたか、また、それをもとに新たな課題をもつことができたか。他の学生と協働的に学修を進めることができ、協働による学ができたか、発表、課題、レポート等にこれらの成果を適確に表現できたか等を評価する。
これらのことが把握出来るように、授業では、毎回小課題を与え、レポートを提出させている。また、発表等では、発表者(グループ)に対して、フィードバックシートを作成して、意見やコメントを書かせている。それを発表者に渡したり、授業で公開して、フィードバックから学んだことを発表後のレポートとして提出させている。これらを総合して評価を出している。

基本的に、授業目標に対する理解度を評価の軸とした。講義形式の授業についてはふだんの受講状況及び試験で、演習形式の授業については通常の授業への参加態度、期末に課すレポートで総合的に判断している。

試験は筆記試験形式。2人で授業を担当したので、それぞれが出題をして、その合計点により成績評価を行った。

出席、発表と質疑応答、レポートの内容の各項目について総合的に評価した。

毎回提出のワークシートを重視しており、現代社会の抱える諸問題について自分なりの意見をもち、それを文章で的確に伝えることができたかどうかを基準にして評価した。最終的には、シラバスに記載したとおり、レポートと合わせて成績評価をつけた。

課題発表20%、自由発表30%、レポート30%、授業参加20%とし、主体的な取り組みを重視した。

出席・問題への解答・授業参加50%、期末筆記試験50%とし、知識理解を重視している。

外国語演習Ⅲは、次のような基準であった。

授業での発表 30%、授業中・授業外での課題・宿題など 40%、授業への積極的な参加 30%
音声学は、「出席(30%)と小テストなどのパフォーマンス(70%)で評価する」とした。ほぼ毎回、何らかの課題を出した。

発表25点(ほぼ全員に25点)、レポート60点、出席率15点の配点で評価した。結果は、S4名、A2名、B4名、C1名、途中放棄2名(計13名)であった。

レポートないしは発表(40点×2回)、授業内レポート(10点)、出席点10点の配点で成績を付けた。当初の予定では、全員に何らかの形で発表してもらおうつもりであったが、それができなかったため、発表者(11人)にはレポートを1回分免除するというやり方に変更した。結果は、以下のとおり。S10名、A8名、B1名、C2名、放棄1名(計22名)。

人物名や書名等の項目に関する筆記試験が40点、最終レポートが40点、発表10点(全員10点)、出席率10点
で成績を付けた。レポートは英文文献の内容をまとめたものであるが、日本語として読みにくい文章は低い評価となった。また、筆記試験は、毎年同じレベルのものを出题しているが、年々平均点が下がっている。今年度の成績はいつもより悪く、S2名、A3名、B6名、C7名、途中放棄4人であった。

アメリカ文学史の理解に不可欠な用語について、正しい理解がなされたかどうかを確認する試験を50点分、残りの50点分は、実際にアメリカ文学史上の傑作を一つ、読んでもらった上で、その作品と学生自身がどうかかわったかということを探る試験とした。用語理解を得意とする学生もあれば、文学作品の理解・分析に秀でた学生もいたが、総合すれば、適当な成績分布になったのではないと思う。

- ・授業中の発言回数とその内容
- ・中間試験を2回実施することで、学生自身がどの程度理解しているかを自覚させている。また、答案用紙の返却時に模範解答を渡し、自分の解答とどこが違うのかを明らかにすることにより、採点への不信や不満を解消できるのではないかと考えている。
- ・雨温図や分布図などを書かせ、その内容を評価している。

成績評価の基準および方法は次の通りである。

- ・口頭発表とその資料(40%)…担当した作品の内容や表現、問題点を十分に理解しているか。
 - ・授業内活動(20%)…他のグループの発表へ、質問・意見等が言えるか。
 - ・くずし字の小テスト(20%)
 - ・レポート(20%)…発表と質疑応答によって得た知識や見解を、適切に応用して関心に沿った論述ができるか。
- なお、実際に提出した成績は、およそSが22%、Aが42%、Bが26%、Cが10%である。

シラバスに記載の通り、定期試験40%、二度行った小テスト30%、出席・授業への参加度30%とした。授業内容が外国語の入門であること、また、学生たちが積極的に準備してくれたこともあり、全体的に成績評価は大変よく、7割の学生が90点以上、4分の1が80~89点となった。

授業中に発表等を行わせるため、その発表の成果とその際の授業態度(質問等による参加)を半分程度評価に組み込んでいる。残りの半分は、期末の課題である。経済学基礎演習ではレポートを課した。経済政策論では試験を課した。

どれだけ講義の内容を理解しているか(すなわちそれを自分の言葉で表現できるようになっているか)、まずはこれに尽きる。

授業中の態度及び年度末試験の内容を見て、授業内容を聞いているか理解しているかをもとに評価しました。

アンケート結果を受けて改善したいところ 【人文社会科学系】

おおむね良好の結果だったので、特に改善すべきことはないと思う。内容については、難しすぎると答えた学生が約3分の1いたが、残りがちょうどいいという解答なので、このままでよいと思う。

まずまずではないかと思う。このままいくつもりである。

(問1)については①と②の合計が100%、(問7)については①と②の合計が87, 5%であることから、授業内容に関しては目標を達成できたと思われる。また、(問13)と(問14)については、「ちょうどいい」という回答がそれぞれ79, 2%と87, 5%であることから、授業の難易度と量は問題ないと思われる。ただし、(問8)と(問10)については、①と②の合計がそれぞれ54, 1%、58, 4%であることから、話し方と板書に関しては改善の余地があると考えられる。

技能習熟の面が強いため、自ら資料等を探すという課題は行っていない。一方で、そのような課題が期待されているのであるのなら、そちらの方に課題内容をシフトしていくことも検討する。

学生たちが真面目に取り組んでくれたお陰で授業はスムーズに進んだが、アンケートの中の問11「教員とのコミュニケーションがうまくとれているか」の評価で、「どちらともいえない」の解答が多かった。学生との時間があまりとれなかったのが原因だと思うので、これからはさらにもう少し学生たちとのやり取りをする時間をもうけたいと思っている。

・アンケート結果は、概ね良好であり、大きな問題はなかったと思う。
・ただし、授業中に口頭で聞いたアンケートでは、講座の最初の方に講読した文献が難解であるという意見が多かったので、来年度は、文献のレベルをもう少しレベルを下げ、かつ現代的な書物にしようと思う。

この授業を受講する新たな学生に、よりわかりやすく、より楽しみながら日本語の使用実態についての理解を高められる授業を目指し、さらなる授業準備に励みます。

教員の話し方については、常に大声で話すことを心がけており、高い評価を得た。今後もこうした点に気を配りながら授業をしたい。自由記述欄の字幕が見えなかったという苦情については、私も同様に感じた。しかしどうしてよいかわからなかった。後で気が付いたが、映像がズームになっていて字幕の部分が画面からはみ出してしまったのが原因であった。次年度は機材の使用方をあらかじめ確認した上で、授業に臨みたい。

フィードバックシートを匿名にしてほしいという意見があったので、次年度は学生と相談して匿名がよいかどうかを検討したいと思う。授業の難易度が「ちょうどいい」と答えた学生が多かったので、もうすこし難しくしてもいいのではないかと判断した。多様な考え方ができるようになったとしているが、批判的な思考により物事をより深く捉えるような場面を増やすことを課題としたい。また、自由記述から、授業内容がニーズに合っていたということが一部ではあるが確認できたので、次年度に活かしたいと思う。

アンケートから、講義形式の授業では能動的な取り組みを促すという点に課題があることが明らかとなった。適宜、問いを用意するなどして、受講者の問題意識を刺激しながら進める工夫をしたいと考える。

授業の難易度について、4割の受講生が難しいと回答していた。同時に1回当たりの授業内容の量についても3割が多いと回答していた。二人で担当しているため、それぞれがかなり圧縮した内容と量で授業を行った結果であると判断される。この点は次回以降、内容・量ともに再検討しなければならないと思われる。

専門科目であるにも関わらず、まったく授業のテーマに興味がないという学生に対しては、授業中の工夫だけでは限界があるように思う。
例えば、志望と異なるコースに進学せざるを得なかった、あるいは、経済的な理由で勉学の時間が思うように取れない、などの学生個人の環境的な要因があるのではないかとこの点も含めて、授業外でのカウンセリングの必要性を感じている。
可能な限り、個々の学生に寄り添える形を今後の課題として考えていきたい。

講義形式の授業が中心であるが、双方向のコミュニケーションをもっと取り入れるよう改善したい。授業の難易度について「ちょうどいい」と回答した学生が8割もいたことから、もう少しレベルを上げてほしいと感じた。

学生同士の学びあいの部分を強化したい。

自主的な学び、学生同士の学びあいを促す工夫をしたい。

外国語演習Ⅲは、引き続き同じ教科書を使いたい、受講者には授業のやり方に不満も多かったはずである。発表者が自主的な学習ができるよう、発表内容の指示をよりの確に行いたい。また、他の受講者が受身的に授業に臨むことがないよう、工夫をしたい。

言語と認識の関係という非常に興味深いテーマを扱った本や論文を読んだので、大多数の学生が新しい知識の刺激を受け、自らも調べることを行ったことがわかった。同時に3分の1の学生が、難易度に関して「難しい」と回答した。私にとってもこの授業の担当は初めてで難しい内容もあったので、それはよくわかるが、学習時間が「1時間未満」の学生が3分の2を占めているので、これでは特に英文論文の読解は難しいであろうと思う。

難易度に関して「難しい」が22.7%あったので、もっと丁寧な説明を心がけたい。一方、学習時間が「1時間未満」が36.4%もあったので、せめて教科書くらいはきちんと読んだのかどうか、チェックできるような体制を考えたい。指定の教科書は決してやさしい本ではなく、一つの章を読むだけでもそれなりに時間がかかるはずである。

難易度に関して、「難しい」と「ちょうどいい」が半々ずつであった。講読した論文の英文自体が難しかったと思われる。もう少し読みやすい英文文献を選ぶべきであったと考えている。

アンケート項目を見ると、「学生同士で話し合った」かどうか、「教員とコミュニケーションがとれた」かどうかを尋ねる項目が低評価であったが、今後は一方的に教員側が内容を伝えるのではなく、ある程度、ディスカッションの時間を作るよう、心掛けたい。

・問1～12までは比較的良い評価をいただいたが、問13「授業の難易度」は低い評価であった。気候の説明の中に気象現象のメカニズムを加える必要があり、文系の社会科学の学生には難しいと感じられたと思われる。もう少し丁寧な説明が必要であろう。
・問15の授業準備の時間が1時間未満の割合が65%であった。もう少し事前の課題を与えてもよいのかと思われる。

授業の難易度について、「難しい・難しすぎる」とした回答が全体の半数弱あり、自由記述欄にもそのような書き込みがあった。くずし字を練習する時間があまり取れなかったため、集中的にくずし字を学ぶ回をもっと多く設けるか、毎回一定の時間(30分程度)をくずし字の練習に当てるなど、自主的な学習に頼りすぎないよう気をつけたい。

アンケートの結果は全体的に好評だったように思われる。特に、話し方・説明のわかりやすさなどについては評価も高く、教師としても嬉しかった。他方、教材のわかりやすさについては若干ながら「あまりそうは思わない」としている学生もいた。今回の教科書は会話主体のものであり、文法的には少々難しいものであっても、説明もなく取り扱われていることも影響しているのではないかと思う。どの教材にも欠点はある、すべての学生に合った教科書など困難であることは承知しているものの、教材研究は今後も続けていかなければならない、と改めて考えさせられた。

アンケートでは内容が難しいと感じる学生が若干いる。その一方、期末レポートでは、簡単すぎると書いている学生もいたため(経済学基礎演習)、さじ加減が難しいが、学生の反応を見ながら臨機応変に対応できるようにしたい。
あと、授業時間外の学習時間が少ないので、何らかの課題を考えたい。

選択で受講している20人前後の授業は、もともと興味・関心があって聞いているのだから、こちらが余程のミスをしなくても、このくらいの評価結果となるのは当然であり、むしろ、これをもっと良い結果とすることができるように、上記のような営為をつづけたい。問題は多数の必修であり、やはりなかなか講義になじめないという反応も生じているようである。しかし、やはり少しでも否定的なリアクションがあるのは残念であり、何とかこれを0に近づけたい。ただ、そこでも何か妙手がある訳でもなく、上記の営為をより徹底して行っていくように自らに課していくしかないであろう。これは終わりのない挑戦である。

授業の難易度の難しいの%が少し高いので、今年度は工夫してみたい。